

# 日韓文化交流基金 NEWS

2012.12.28 NO.64

The Japan-Korea Cultural Foundation

## Contents

- 1-3 「アジア大洋州地域及び北米地域との  
青少年交流(キズナ強化プロジェクト)」本格化
- 4-5 第13回日韓文化交流基金賞  
基金賞受賞者エッセイ  
韓日文化交流会議委員長・東西大学校碩座教授  
鄭求宗
- 6-7 青少年交流  
日韓交流ユースカップ2012
- 8-9 フェロー研究紹介  
1930年代の東アジア地域間における文化の交渉  
と翻訳—モダン都市東京・ソウル(京城)と文芸—  
波瀾剛
- 10-11 日韓文化交流基金事業報告  
(2012年7月～9月)
- 12 理事長退任挨拶  
ここ数年の事業を振り返る—理事長  
退任にあたって



(震災がれきストックヤードを見学)

## 「アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流 (キズナ強化プロジェクト)」本格化

東日本大震災からの復興状況への理解を深めるために、アジア大洋州地域及び北米地域の41の国・地域との間で、1万人以上の青少年交流を行う「アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流(キズナ強化プロジェクト)」が本格的に動き出しました。これまでに、被災地と韓国の800名\*を超える青少年が相互に訪問しました。

※4月から9月までの人数

当基金では、被災地域の青少年派遣のほか、被災地視察や交流の機会を提供する青少年招へいを通じ、震災からの復興に取り組む日本の姿を伝えることを目指しています。これらを通じて、参加した青少年たちが日本及び被災地と韓国のキズナを強く感じ、その思いが様々な形で周囲に広がっていくことを期待しています。ここでは招へい事業の被災地訪問内容を一部紹介します。



村田町で葦の被害状況を視察する(韓国大学生訪日研修団)

### 韓国中学生訪日研修団

#### 【茨城県潮来市訪問】

潮来市の震災被害と復興に関する講義  
日の出地区の被災状況(液状化現象など)、がれきストックヤード視察  
地元青少年との交流会、前川あやめ園での整備活動など

### 韓国大学生訪日研修団

#### 【宮城県仙台市、柴田郡村田町等訪問】

松島湾視察  
宮城大学訪問(宮城大学大学生によるボランティア体験講義及び学生間交流)  
村田町での土蔵視察など

### 韓国青年訪日研修団(高校生)

#### 【茨城県水戸市、北茨城市等訪問】

北茨城市の震災被害に関する講義  
大津港(魚介類の放射能測定検査)、アクアワールド大洗水族館(震災被害・復興への取組)など視察  
老人ホーム慰問、天心焼チャリティー作品作り

### 外務省招聘韓国大学生訪日研修団

#### 【宮城県大崎市、本吉郡南三陸町訪問】

バイオディーゼルのプラント、ホタテ・ホヤ養殖施設など視察  
蕪栗沼保全活動視察  
地元漁業関係者との交流  
海藻を使った環境教育体験など

「キズナ強化プロジェクト」で茨城県と宮城県を訪問した韓国の中高一・大学生は、被災地の視察や地元の学生との交流などを行いました。ここでは9月までに訪問を終えた団員の感想を紹介します。

### 韓国中学生訪日研修団

・被災地を訪問する前は、地震のような自然災害がどれほど危険か、またどれほど多くのものを人びとから奪っていくのかわからなかった。しかし地震の被害地域を回りとても驚いた。それは地下にあった水道管が地上に飛び出し街路樹や電柱も傾いていて、危なく見えたからである。一つの国の文化を奪っていくほどの地震災害の威力を感じた。しかし講義で現在はほとんど復旧されていることを聞いたので安心した。今回の地震被害地の訪問を通じて、地震という暗い悪夢の中でも、復興、希望を感じさせてくれた茨城県住民の方々の強靭さを垣間見、私の心も強くなった気がする。このプログラムを終えて韓国に帰ったら、辛い状況の中でも希望となるのは、周りから差し出された助けの手だということを友達に伝えたい。私たちは日本と海一つを隔てて向かい合っている友達の国である。これからは私たちだけでなく、私たちの子孫もグローバル時代を迎えお互いに協調する仲になれたらと思う。

・今回の訪問地である潮来市では多くのことを感じた。プログラムの中でもっとも印象深かったのは、あやめ花壇の整備と潮来市の同世代の学生達との交流会であった。講義では被害を受けた地域が完全に復旧するには長い時間がかかると聞いたので、住民の人びとは心に多くの傷を受けただろうと思っていたが、潮来市で出会った人びとは私たちを親切に迎え入れてくれた。特に交流会で出会った日本人の学生は、私たちより明るくて楽しませてくれた。文化交流を通じてお互いの文化をさらに理解することができ、言葉は通じなかったが、身振り手振りで交流できた。このプログラムの名前のように、お互いの絆が強くなり、日本という国をととても近くに感じた。



震災がれきストックヤードを見学（潮来市）

### 韓国青年訪日研修団（高校生）

・講義で知った復興の実態や、放射能測定器具について熱心に説明してくれた茨城漁業環境研究会の人びとをはじめ、被災地の人びとが親切で、自分たちの仕事を一生懸命にしている様子を見て、私は言葉には表しきれないくらい感動した。被災地というが、私たちと同じように、人びとがここで暮らしており、震災から1年半過ぎた今まで頑張っ街を復旧し復興させている姿がもっとも記憶に残っている。また放射能に関して来日前は心配をしていたが、実際に来てみると心配するようなレベルではなかった。

韓国に戻ったら、友達に日本の人たちがどうやって立ち直ったか、そしてこの茨城県がどれほど美しいところかを必ず伝えようと思う。大学生になったら、また茨城に来たい。今よりもっと復興した街やホテル、港、水族館や鉄道、そして心温まる老人ホームをまた訪問し、また来ましたよとお年寄りの手を握ってあげたい。本では学べない大切なものを「心」で学んだような意義深いプロジェクトだった。

・東日本大震災後直後、私の学校と姉妹校協定を結んでいる日本の高校に励ましの手紙を送ったことがある。地震の状況も詳しく知らず、被害についてもよく分からなかったので、この手紙には詳しい内容を書くことができなかった。今回、「キズナ強化プロジェクト」に参加して、私は去年手紙を書いた時の気持ちがどうだったのかを思い浮かべ、その時と同じ気持ちでプロジェクトに一生懸命参加することができた。

視察で訪れた大津港では被災状況や今も漁ができない実態を知った。港の復旧工事が早く終わり、もう一度大津港が元気な姿になることを願う。これまで被災地の皆さんが元の姿を取り戻そうと非常に努力したことからも、必ず元のように元気な姿を取り戻せると信じている。



水揚げした魚介類の放射能測定装置に関して講義を受ける

## 韓国大学生訪日研修団

・テレビでは沿岸部の被害状況だけを見ていたので内陸地方でどの程度被害があったのかわからなかったが、今回の村田町の訪問を通じ、内陸地方でも想像をはるかに超えた被害があったということを知り、とても驚いた。宮城大学の講義の際に見せてもらった映像では東日本大震災が起こった時、建物が揺れ、住民の人びとも動揺している姿が映っており、とても衝撃的だった。村田では蔵の瓦が崩れ落ち、家の中の廊下までも被害が出た。しかしそれを復旧・復興しようとする努力、壁と天井を修理して昔の建物を違う用途として活用し、大震災以前の村田の姿を取り戻そうというたくましい日本人の姿もまた印象深かった。

韓国に帰ったら、見聞きた被害状況と合わせて日本人の復興の努力のほか、間違った、誇張された風評被害で、被災された人びとがどれほど被害を受けているか、合わせて知らせたい。

・一番印象に残ったのは被災地住民が引越しをしたり、町から離れたりせず、町に愛情と希望を持って、復旧・復興させようと努力している姿である。村田で喫茶店を営んでいる主人の話を伺ったところ、利益を出すためだけでなく、町の復興と活性化のために喫茶店の経営を続けているとのことだった。

テレビでだけ見ていた地震被害を実際に自分の目で見て、被害状況が恐ろしいということがわかった。家の一部が壊れ、町全体も被害を受けているのは本当に無残なことだと言わざるを得ない。そんな恐ろしい状況にも希望を失わず、一生懸命復旧に努力する日本人の精神力は本当に強いと思う。



学生ボランティア活動について質問をする(宮城大学)

## 外務省招聘韓国大学生 訪日研修団

・もっとも印象深かったのは、「復旧」作業をする中でも、その先にある「復興」を願い、粘り強く歩んでいる被災地の人びとの「素朴な心」だった。被災者というよりも、地域を愛し、地域を守り抜いていこうとする人びとのように私の眼には映った。

漁業体験では、漁師の方が「遠くから、よく来てくれた」と新鮮なホタテをたくさん焼いて提供してくれた。また、海を愛する心、そして「津波に町を奪われたけれど、海を恨まない」と言った漁師の方の正直な気持ちを知ることができた。宮城県内陸地域では、バイオディーゼルの研究や、野生の鳥と湿地を守るため、熱心に研究をしている方々の活動を知った。特に珍しいと思ったのは、菜種やアシ(葎)を利用した代替エネルギーの開発だった。帰国したら周りの人たちに、日本人の親切さ、東日本大震災の深刻さ、そして美しい自然の広がる日本の田舎の風景を伝えたいと思う。

・大変な目にあいながらも自分の故郷を離れず、笑顔で力強く生き抜いている日本の人びとの姿はとても素晴らしいと思った。訪問する前は、多少の不安はあったが、実際訪問してみると、そのような不安がまったく無意味なことであったことを悟った。ニュースではなく、実際に見た被災地の様子は想像以上でとても驚いたが、このような被害を受けても、その場所を復興させるため、地域の人びとが力を合わせて頑張っている姿がとても印象的だった。今は復旧段階で、もう少し時間はかかるかも知れないが、何としても復興が成し遂げられることを私は大いに期待したい。韓国に帰ったら、日本で、東北で見たことをたくさんの人たちに伝えたいと思う。東北の未来に期待し、また訪れたい。それまでの間、韓国で応援し続けることにしたい。



ホタテ養殖施設にて、沿岸漁業の復興状況を見学する

以上のように、韓国の中高校生・大学生はこのキズナ強化プロジェクトを通じて、被災地を直接訪れ、被災地の方々からたくさんのお話を聞き、日本人の強さやたくましさを感じたようです。

10月以降も被災地と韓国青少年の間で、日本再生に関する理解増進と、キズナを深めていく交流が続いています。

(この他のキズナ強化プロジェクト関連記事はP6-7などに掲載しています。)



## 第13回日韓文化交流基金賞

日韓文化交流基金では、学術・文化分野の交流を通じて日韓両国間の友好親善に寄与した韓国人の功績をたたえるため、1999年に「日韓文化交流基金賞」を創設し、毎年1回、日韓文化交流基金韓国訪問団レセプションで表彰しています。今回の受賞者は、鄭求宗氏、金青子氏、崔光準氏の三氏に決定し、授賞式は9月14日にソウルのロッテホテルで開催しました。



表彰式

### 受賞者プロフィール



鄭求宗(チョン・グジョン)

1944年生まれ

東西大学校碩座教授

日本研究センター所長

東亜日報特派員としての東京駐在以来、長きにわたって日韓関係の発展に貢献されています。日韓文化交流会議には第1期から参加され、第3期では韓国側委員長を務められる等、両国間文化交流の推進にも大きな功績を残されています。



金青子(キム・チョンジャ)

1953年生まれ

蔚山広域市文化観光解説士会

副会長

文化観光ガイドとして長年自治体間交流の一線で活躍されてきました。特に蔚山、釜山地域に残る文祿・慶長の役の際の遺構「倭城」の文化財指定や国内外への紹介に尽力される等、日韓の地方間の地道な草の根交流に貢献されています。



崔光準(チェ・クワンジュン)

1957年生まれ

新羅大学校人文社会大学外国語学部

日語日文学科教授

万葉集についての研究及び韓国国内での紹介の他、一般向けの日本文化講座の開設や案内書籍の刊行等、多様な分野で日本との交流を進めてこられました。近年は、韓国の学生を日本の福祉施設に派遣する等、社会福祉分野での交流も実践されています。

### 第28回日韓文化交流基金韓国訪問団

当基金の理事、評議員等からなる「日韓文化交流基金韓国訪問団」が9月13日から15日までの3日間、韓国を訪問し、韓日文化交流基金をはじめとする関係者や安豪榮(アン・ホヨン) 外交通商部第1次官、郭滌鎮(クァク・ヨンジン) 文化体育観光部第1次官への表敬訪問、日韓文化交流基金賞の授与、フェローシップ経験者との懇談、水原華城の見学などを行いました。

#### <参加者>

団 長 鮫島 章男  
副団長 内田 富夫  
顧 問 戸塚 進也  
顧 問 竹内 宏  
顧 問 小山 敬次郎  
団 員 檜崎 正博  
団 員 大竹 洋子  
団 員 阿部 孝哉

当基金会長、太平洋セメント(株) 名誉顧問

当基金理事長

当基金理事、前掛川市長、元衆議院議員

当基金評議員、静岡県立グローバルセンターセンター長

当基金監事、東京経済大学理事、元経団連専務理事

当基金理事、前関電産業(株) 相談役

当基金評議員、東京国際女性映画祭ディレクター

当基金業務執行理事



安豪榮外交通商部第1次官への表敬訪問

## 基金賞受賞者エッセイ

このたびは、第13回日韓文化交流基金賞の受賞にあたり、私個人にとっても日韓・韓日文化交流会議にとりましてたいへん光栄に存じます。なによりも今年8月を前後に日韓関係がぎくしゃくしている最中にもかかわらず、日韓文化交流基金の鮫島章男会長、内田富夫理事長をはじめ日本側の皆様がソウルまでおいでになり、受賞式に踏み切ったことに非常に感銘を受けました。皆様に改めて感謝申し上げます。

今回の受賞で評価された私の日韓文化交流における活動は、主に日韓・韓日文化交流会議を通じてのことであると受け止めておりますが、普段から信念をもって尽くしてきた日韓関係のための小さな努力に対する大きな報奨であると思っており、恐縮いたしております。

### 日韓・韓日文化交流会議発足

私は、今から30年前の1982年に韓国の全国紙である東亜日報の東京特派員として来日しました。その後韓国に戻りましたが、東亜日報東京支局長や慶應義塾大学訪問研究員として再び日本に来る機会があり、合わせて8年半ほど滞在しました。当時は、仕事や研究活動が目的であったため、多くの日本の方々とお付き合いする機会があり、大変お世話になりました。しかし、日韓交流については関心をもつ余裕がありませんでした。

私が経験した1980年代から90年代半ばまでの日韓関係は、経済関係や外交安保での協力が柱となっていて、お互いの社会や文化については、88年のソウル・オリンピック以後から段々と関心をもつようになり、人的交流も進んでいったと記憶しています。

韓国と日本は、植民地時代へのわだかまりや過去史をめぐる歴史認識の隔たりがありましたが、終戦20年となる1965年に国交を正常化しました。1998年には金大中・小渕恵三両首脳による「日韓パートナーシップ宣言」が発表され、「21世紀に向けての日韓新時代」を打ち出しました。

その象徴的な交流プログラムとして両首脳による合意で発足したのが日韓・韓日文化交流会議です。交流会議の提言や活動は、韓国政府による日本大衆文化の開放措置と、韓流が日本でブームになるなど、活発な両国文化交流につながりました。

私は、韓国側の委員の一人として参加させて頂き、今日にいたりましたが、第3期目の2009年より韓国側の委員長として文化交流活動に本格的に取り組むようになりました。

### 日韓関係の発展と政策提言

ここで最近10数年間にわたって日韓間で行われた文化交流の現状と、それによって行われた日韓関係の発展について振り返ってみると、1998年韓国政府の日本大衆文化の開放

措置によって国際映画祭で受賞した優秀な日本映画が韓国で公式に紹介されました。また、韓国のテレビドラマ「冬のソナタ」、「チャングムの誓い」は、日本での「韓流」ブームのきっかけとなりました。韓国でも日本ドラマ（イルド：일드）がケーブルTVとインターネットを通じて紹介され、K-POPよりもJ-POPが韓国で人気を集めました。



日韓間のこのような文化交流の波は、二国間の人的交流への拡大につながり、年間500万人の両国国民が往来する時代となりました。

日韓・韓日文化交流会議は、日韓両政府への政策提言などを通じて両国の文化交流活動を支援してきました。2012年5月ソウルで開かれた全体会議では、日韓・韓日文化交流会議発足以来の両国文化交流の劇的な拡大を踏まえ、質的充実化をはじめとするこれからの課題について論議し、その結果を取りまとめて両政府に提言するとともにメディア発表を行いました。

### 文化交流の果たすべき役割

ところが東アジアでは最近、歴史認識の違いや領土問題が、これまで続いてきた三国の近隣関係を揺るがしかねないような摩擦と葛藤を引き起こしています。日韓の間、または日中間に起きている今年（2012年）の政治・外交的摩擦をなくす解決への道のりを、文化交流を通じて糸口を探す努力が切に求められる時期となりました。東アジア3か国関係回復のために文化交流が果たすべき役割が期待されています。

日本の作家、村上春樹さんは、「1Q84」などの作品が韓国でも中国でも広く読まれていて、今は「世界の作家」ともいわれていますが、2012年9月28日付の朝日新聞への寄稿を通じて、東アジアの領土をめぐる問題が文化交流に影響を及ぼすことを憂慮し、東アジアの日中韓文化交流の円満な往来を守るために政治・外交の自制を促しました。

日韓間の文化交流が以前より活発に行われ、政治・外交で梗塞している両国関係の回復に向けて働くためには、まず、日韓・韓日文化交流会議という協議体の枠組みを引き続き維持していかなくてはなりません。日韓両国は、このような時期であるからこそ、14年前の金大中・小渕両首脳の「21世紀宣言」の原点に戻り、日韓・韓日文化交流活動がつかかさねてきた日韓友好親善の現状を大事にし、引き続き守っていくべきではないかと思えます。その意味でも今後スタートするであろう第4期の日韓・韓日文化交流会議の活躍が期待されます。

# 2002FIFAワールドカップ日韓共催10周年記念事業 日韓交流ユースカップ2012

後援:外務省、公益財団法人 日本サッカー協会  
協力:財団法人 茨城県サッカー協会

2012年7月25日(水)から8月9日(木)まで、外務省による「アジア大洋州地域及び北米地域との青少年交流(キズナ強化プロジェクト)」の一環として、「日韓交流ユースカップ2012」を実施しました。

本事業では、東日本大震災の被災地の高校生が韓国の高校生と6つの日韓混成チームを結成し、相手国を訪問しながらサッカーを通じた交流を行いました。また震災からの復興に関する情報発信や被災地視察を行い、日本再生に関する理解を深めました。8月5日(日)から8日(水)には事業を締めくくる集合行事として日韓混成の6チームによるプレゼンテーション・コンテストおよびサッカー大会を行いました。



## ■参加チーム

- (1) 東北学院高等学校・錦湖高等学校クムホ
- (2) 福島県立湯本高等学校・仁川南高等学校インチョンテゴン
- (3) 茨城県立竹園高等学校・仁川大建高等学校インチョンテゴン
- (4) 茨城県立波崎高等学校・漢陽工業高等学校ハニヤン
- (5) 千葉明德高等学校A・慶熙高等学校キョンヒ
- (6) 千葉明德高等学校B・在鉦高等学校チェヒョン



決勝戦に臨む選手たち

## 派遣事業

### ■7月25日(水)～7月31日(火):韓国国内(各交流先地域)

本事業は、東日本大震災の被災地の高校生が各地から韓国を訪問する派遣事業からスタートしました。5～7日間の日程で、韓国側に対し、東日本大震災の被災・復興状況を発表したほか、サッカーの練習や試合を行いました。

韓国側への発表では、各チームとも記録写真や動画を活用し、被害の様子・再生状況を理解してもらえるよう工夫して説明しました。復興の状況に加え、風評被害の払しょくのための取り組みや震災後に途絶えている地元と韓国との定期直航便の早期再開など、各自の強い思いをアピールし、韓国側生徒と8月上旬の日本での再会を誓い合いました。



仁川南高校を訪問する福島県立湯本高校の生徒

## 【参加選手の感想】

### 日本側

「自分たちのチームが日韓で一番コミュニケーションがとれた。最高の友だちができた」  
「ペアのチームはもちろんのこと、他のチームとも仲良くなれたことがよかった」  
「文化は異なるが、サッカーを通じて一つの目標に向かうよい経験ができた」

### 韓国側

「実際に目にした被災地のことを韓国に帰国後、周りに伝えたい」  
「出会った当初はぎこちなかったが、日本側の配慮でうまく交流できた」  
「仲良くなった日本人の友達に、また会いたい」



## 招へい事業

### ■各チーム地元での交流

8月2日(木)～8月4日(土):日本国内(各地域)

韓国での交流を終え帰国した日本側チームは、8月2日(木)・3日(金)にかけて来日した韓国側チームを迎え、それぞれの地元にて招へい事業を行いました。派遣事業で日本側が発表した被災・復興の現場を実際に見学し説明を受け、現在の姿を韓国側生徒一人一人の目で見て感じてもらう時間を持ちました。また、学校訪問などの交流、サッカー交流試合なども行われました。

### ■集合行事 8月5日(日):茨城県笠間市

全チームが茨城県笠間市に集合し、被災した笠間焼の登り窯の見学のほか、同市の震災被害と復興の状況について、笠間焼窯元・福田勝之代表からお話を聞きました。窯の修復の様子を間近に触れ、被災された方から直接話を聞いたことで、質疑応答の時間には、両国の高校生から「観光客への影響、今後の地震対策」など、熱心な質問が続きました。



被災した登り窯の修復状況を聞く日韓の高校生

### ■プレゼンテーション・コンテスト、サッカー大会

8月6日(月)～8月8日(水):茨城県つくば市

6日から3日間、日本側チームの地元および笠間市で行った被災地見学やこれまでの交流の様子を発表するプレゼンテーション・コンテスト、日韓混成チームによるサッカー大会を開催しました。

## 大会総合結果

プレゼンテーション・コンテストと2日間にわたるサッカー大会の結果、総合優勝はプレゼンテーション・サッカー大会とも1位の好成績を収めた〈茨城県立竹園高校・仁川大建高校〉チームに決定し、表彰式にて当基金の鮫島章男会長から優勝トロフィーが贈呈されました。また、全チームに玄葉光一郎外務大臣からの賞状が授与されました。

順位	総合点	チーム名
1位	100	茨城県立竹園高校・仁川大建高校
2位	80	茨城県立波崎高校・漢陽工業高校
3位	75	東北学院高校・錦湖高校
4位	55	千葉明德高校B・在鉾高校
5位	40	福島県立湯本高校・仁川南高校
6位	35	千葉明德高校A・慶熙高校

6日(月)のプレゼンテーションでは、「派遣・招へい事業で交流をして、私たちにできること」というテーマのもと、派遣事業での日本側の復興状況の発表から招へい事業までの一連のプログラムを通して、被災地の現在の姿を知ることになった経緯や、被災地での視察・ボランティア体験を通じて感じたことが披露され、「思いやりを持って、助け合っていくことの重要性を知った」、「貴重な経験に感謝したい」、「人と人の絆を深めることの大切さを感じた」などの意見が述べられました。



被災地で実際に見て感じたことが語られた

7日(火)・8日(水)2日間は、セキショウ・チャレンジスタジアムに場所を移し、A・B2組に分かれたリーグ戦の後、同順位同士の順位決定戦が行われました。両リーグで1位となった〈東北学院高校・錦湖高校〉チーム対〈茨城県立竹園高校・仁川大建高校〉チームによる決勝戦では、接戦の末、〈茨城県立竹園高校・仁川大建高校〉チームが勝利を収めました。



互いにメッセージを書いた記念ボールを交換



満面の笑顔で優勝を喜ぶ茨城県立竹園高校・仁川大建高校チーム

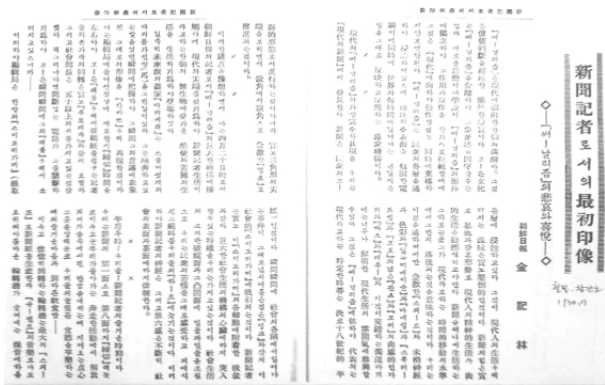
# 1930年代の東アジア地域間における文化の交渉と翻訳 —モダン都市東京・ソウル(京城)と文芸—

## 文学史という枠組み

「エロチシズムと、ナンセンスと、スピードと、時事漫画風のユウモアと、ジャズ・ソングと、女の足と——。」これは1930年の末に刊行された川端康成の小説『浅草紅団』の一節である。昭和モダンの最盛期、まさに「モダン」という語が流行語となった年、浅草を舞台として都市化の進む東京の姿をとらえた作品として有名である。

文学史をどのように見直していくのか。この問題は文学研究において常に重要な課題であり、昭和モダンの文学についても新たな作業が始められている。2011年3月11日以後、『浅草紅団』が関東大震災以後の「復興の文学」として読み直されているのもそうした例といえるだろう。

私も同様の問題意識を抱えているが、一国のなかにとどまらず東アジアという範囲で文学をとらえることはできないかという視点に立っている。というのも、たとえば先ほどの『浅草紅団』の一節が、韓国のモダニスト金起林による「急激なスピード、抹消神経、色彩、イルミネーション、マネキン、ストリートガール、モボの幅広のズボン、モガの肉感的な足、ジャズ、レビュー」といった注目とだぶって見えるからだ。(金起林「新聞記者としての最初の印象」『鉄筆』1930年7月、青柳優子・編訳著『朝鮮文学の知性』新幹社、2009年、p.88)



金起林「新聞記者としての最初の印象」『鉄筆』1930年7月

両者の類似は、ある意味で当然だといえる。1930年、金起林は東京での留学生生活を終えてソウル、当時の京城に戻ってきたばかりだった。東京におけるモダンの空気を十分に味わって、そこでの経験を踏まえながら朝鮮日報社の文芸記者としての生活を始めている。したがって、モダン文化に関する認識が共通しているのも無理はない。

日本の近現代文学を専攻しながらも、しばしば視野に入ってくる隣国のモダニズムに関する情報。私のなかで興味関心が長年蓄積し、今回フェローシップの支援を受けて、本格的に調査を始めることになった。

## モダン研究の流行

韓国に滞在して改めて感じたのは、韓国の人文・社会科学分野において、2000年代に入り1920～1930年代の植民地都市京城のモダン文化に対する関心が急速に高まっている点である。その一端は日本語訳書からも知ることができた。とはいえ韓国国内で発表される論文と研究書はかなりの量におよび、量産体制に入っている。

いまや社会学、歴史学を中心にして、モダンガール、カフェ、百貨店、博覧会、建築、広告、ファッション、風刺漫画、音楽、映画、演劇等々と、当時の日常文化、大衆文化、風俗文化の様子が一次資料の提示とともに明らかになってきている。これはたんに学術の領域にとどまらず、いわゆる「韓流」の領域でも浸透している。TVドラマ『京城スキャンダル』、映画『ラヂオ・デイズ』『モダンボーイ』、モボ・モガを主人公とする演劇などが次々と制作され、1930年代を時代設定に置く物語にもこれまでない「明るさ」「華やかさ」が見られるようになった。

今回が二度目の韓国長期滞在である私にとって、これらの事実には驚きを隠せなかった。なぜなら、前回1998年から99年にかけて滞在した際には、1930年代の文化は「暗黒期」の一部であり、文学研究において日本との関係を考慮する場合もプロレタリア文学が中心であると理解していたからだ。もちろん当時は今よりもさらに韓国語が未熟であったし、大学院生レベルでの理解であった点は考慮すべきだと思う。だが、日本の大衆文化開放に関する不安や否定的見解がメディアで盛んに喧伝されるなかで、植民地時代における大衆文化を日本との連続性を加味しながら積極的に研究するのは困難であろうという思いを抱いていた。

## 「国文学者」の交流へ向けて

フェローシップによる滞在中、まず考えたのは、韓国のモダニズム文学研究に対する日本文学研究者としての貢献についてである。たとえば、モダニズム文学者の集団「九人会」の場合、入れ替わりがあって総勢13人を数えるメンバーのうち、金起林以外にも、鄭芝溶、朴泰遠が日本の大学へ留学している。また、朝鮮総督府に就職した李箱や、京城帝国大学に進学した李孝石は日本人を通じて内地のモダニズムをタイムラグなしに知ることができた。モダニズム文学に関して日本、韓国双方の国文学者が情報を寄せ合うことで新たに見えてくることもあるだろうと感じた。

また、韓国におけるモダン文化研究が明らかにしてきているように、消費文化、大衆文化、風俗文化としてのモダンが1930年代のソウル(京城)で最盛期を迎えていた。「エロ・グロ・ナンセンス」の語が日本文化の専売特許とはいえにくい、新聞、雑誌で「エロ・グロ」事件・情報が紹介されていたのである。



このような同時代性が確認できる一方で、より詳しく見ていくと両国での違いも当然現れてくる。日本では1930年頃から「スポーツ小説」というサブ・ジャンルが普及してくる。しかし、同様の例を見つけることは難しいし、映画をめぐる文学者の関わり方にも差がある。これらの違いには宗主国と植民地における文化の政治学が関わっている。

さらには、1930年9月に菊池寛、横光利一、池谷信三郎らが満洲へ向かう途中に飛行機でソウル（京城）に立ち寄ったことや、同じ年に東京で詩集『カチ』を出版した内野健児は大田で長年過ごした後日本に戻っていること、冒頭で『浅草紅団』を紹介した川端康成が崔承喜のファンであったことなどなど。断片的な情報はこれまでも明らかにされてきたが、今後解明すべき点は多い。



韓国におけるモダン文化研究書の例

### 「外国人」研究者として

次には、韓国文学・文化を研究しようとする外国人として何ができるのだろうかと考えた。韓国行きを決心するきっかけは先ほど紹介した金起林の一文以外にもある。金振松『ソウルにダンスホールを』の日本語訳が2005年に刊行されたとき、わたしは同書の最後の引用に強く興味を抱いた。それは1935年から翌36年にかけて雑誌『朝光』で連載された「モダン沈清伝」という古典小説のパロディに関するものである。両班の沈鶴圭と郭氏夫人がようやく子を授かるときのエピソードになぜかジョセフィン・ベイカーの精霊が登場し、挿絵では飛行士の姿をして右手に薬を持っていた。これらの奇妙な組み合わせに目が引かれたのである。

小説の台詞では新聞広告でジョセフィン・ベイカーの広告をしばしば目にするというが、実際にそのような広告は見つからなかった。そこで新聞、雑誌をあこれめぐってみると、朝鮮で二番目の女性飛行士となった李貞喜が薬の広告に出てくることを知ったがこれも「モダン沈清伝」掲載の後。

当時女優を起用して薬を広告する例も多々見られるが、直接ジョセフィン・ベイカーには結びつかない。媒介として考えられるのは、1935年から広告界で注目を浴びようになった「半島の舞姫」崔承喜であり、「パリの舞姫」ジョセフィン・ベイカーとの連想である。ひとつの資料をめぐってもその歴史的文脈をかんたんに把握できない外国人であることが、かえって研究のきっかけを与えてくれる。

植民地的近代性（＝コロニアル・モダニティ）の議論は、植民地近代化論と植民地収奪論との二項対立から脱却する視点を提供し、日常生活の掘り起こしに成功したといえる。その一方で、植民地支配に対する相対的な関心の低さが批判の対象ともなっている。このような状況をふまえたうえで、韓国における研究の成果を積極的に活かしつつ、あらためて帝国主義・植民地支配の文脈に置きなおしたときに何が見え、どのように評価するのか。これが私にとっての今後の課題である。



「モダン沈清伝」中にある挿絵



なみがた つよし  
波瀆 剛

### PROFILE

筑波大学大学院文芸・言語研究科修了。2002年3月、博士（文学）学位取得。2006年より九州大学大学院比較社会文化研究院准教授（在職中）。専門は日本近現代文学、比較文学。単著に『越境のアヴァンギャルド』（2005年、NTT出版）などがある。

# 日韓文化交流基金事業報告

本号では、2012年度第2四半期(2012年7月1日から9月30日まで)の実施事業を紹介します。

## 1 青少年交流事業

### 訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国大学生 (第1団)	崔丞馥(チェ・スンボク) 国立国際教育院国際交流部 書記官	29	8	21	7/16~7/25	宮城大学 武庫川女子大学
韓国大学生 (第2団)	関丙勳(ミン・ビョンフン) 大田大学校人文芸術大学 日語日文学科教授	30	11	19	7/16~7/25	宮城大学 龍谷大学
韓国青年 (第1団)	林良燮(イム・ヤンソプ) ソウル寿命高等学校 日本語科教諭	30	9	21	7/30~8/8	神奈川県立神奈川総合 産業高等学校
韓国青年 (第2団)	朴哲弘(パク・ Cholホン) 東亜大学校芸術大学 音楽学部教授	28	8	20	7/30~8/8	船橋市立船橋高等学校
韓国大学生 (外務省招聘)	白ナレ(ペク・ナレ) 外交通商部文化交流協力課 書記官	30	11	19	9/8~9/21	慶應義塾大学環境情報学部

団体名	団長	計 <sup>※1</sup>	男 <sup>※2</sup>	女 <sup>※2</sup>	期間	主な訪問先
韓国中学生 (第1団)	林炳泰(イム・ビョンテ) 銅雀高等学校 教頭	49	18	26	9/6~9/12	さいたま市立岸中学校
韓国中学生 (第2団)	金鍾鉉(キム・ジョンヒョン) 華溪中学校 校長	50	17	28	9/6~9/12	さいたま市立春里中学校
韓国中学生 (第3団)	鄭洪培(チョン・ホンベ) 登元中学校 校長	48	20	23	9/20~9/26	さいたま市立八王子中学校
韓国中学生 (第4団)	金慶愛(キム・ギョンエ) 中浪中学校 校長	50	20	25	9/20~9/26	さいたま市立川通中学校

※1 引率含む ※2 生徒のみ

訪日団では、上記訪問先のほか被災地の学校や施設を見学しています。詳しくはp1-3をご覧ください。

### 訪韓団

団体名	団長	計 <sup>※1</sup>	男 <sup>※2</sup>	女 <sup>※2</sup>	期間	主な訪問先
宮城県 中学生	漢人真二(引率代表) 宮城県仙台二華中学校	52	9	40	9/9~9/15	登元中学校
福島県 いわき市 中学生	吉田浩 いわき市教育委員会 教育長	49	29	15	9/24~9/30	光熙中学校

※1 引率含む ※2 生徒のみ



地震発生時の様子を熱演する団員  
(いわき市中学生)

## 2 日中韓青少年交流事業「日中韓青少年未来フォーラム」

「キズナ強化プロジェクト」の一環として、7月24日(火)から31日(火)に韓国で開催された、平成24年度日中韓青少年交流事業「青少年未来フォーラム」への日本青少年代表団100名の派遣を行いました。

韓国および中国からの参加者およそ200名をあわせ、3か国全体で約300名規模の事業となった今回の「青少年未来フォーラム」では3つのテーマに沿ってグループごとの議論を行い、発表を行いました。また、並行して行われた「友情の街祭り」では、日本紹介ブースを運営し、参加者が被災地で撮影した写真及び動画を紹介する等、日本の復興の取組について紹介しました。



「友情の街祭り」の日本紹介ブース

## 3 賛助会員

2012年7月1日～9月30日の期間に、個人会員12名の方に賛助会員制度にご加入いただき、16万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます(五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数)。

### 個人

饗庭孝典	李仁子	梶谷崇	熊野清貴	小泉勇治郎
齋木崇人	上保敏	田中正敬	中江新(5)	三谷太郎
實生泰介	尹景徹			

## ◆2013年度公募プログラム案内◆

当基金は、民間の日韓交流事業を支援する<人物交流助成>と、学術定期刊行物の刊行を支援する<学術定期刊行物助成>の2種類の助成を実施しています。2013年度分の募集期間は、下記の通りです。申請案内と申請書様式は、当基金ウェブサイト <http://www.jkcf.or.jp> からダウンロードできますので、どうぞご利用ください。なお、人物交流助成、学術定期刊行物助成とも、年1回の募集となります。詳しくは申請案内をご覧ください。

### 人物交流助成(2013年度(2013年4月～2014年3月)実施事業)

募集期間:2013年1月4日から1月25日まで

### 学術定期刊行物助成(2013年度(2013年4月～2014年2月))

募集期間:2013年1月15日から1月25日まで



## 〔日韓文化交流基金〕

### ここ数年の事業を振り返る—理事長退任にあたって

2012年12月 基金理事長 内田 富夫

公益財団法人 日韓文化交流基金は1983年に設立され、日本と韓国との人的交流を促進することにより両国国民間の相互理解、相互信頼関係を高めるために様々な事業を行ってまいりました。私は2004年から2012年まで8年あまり理事長を務めさせていただき、この度退任することになりました。この機会にここ数年の基金の事業を振り返り個人的な思い出などをニュースレターの読者のかたがたにお届けしたいと考えます。

当基金の事業は、大きく1) 日韓間の青少年交流、2) 日韓間の学者・研究者の交流、3) 博士課程修了以上の研究者を対象としたフェローシップ、4) 日韓間の草の根交流に対する助成、5) 当基金役員団の韓国訪問事業の五つに分けることができます。

その中でも予算的にも規模としても一番大きいのが青少年交流です。2004年から2011年までの8年間の青少年交流の実績を表にしてみました。数字はこの8年間で訪日・訪韓した青少年の人数です。[✓]

#### <青少年交流実績>

年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
訪日(人)	869	446	480	1206	1442	1442	1558	1440
訪韓(人)	445	305	325	345	499	595	548	732
合計(人)	1314	751	805	1551	1941	2037	2106	2172

1) ここ数年の数字を見ますと、日韓間の青少年交流が高いレベルで維持されていることがお分かりになると思います。特に2007年から2011年までの5年間については、「21世紀東アジア青少年大交流計画(JENESYS)」が実施され、以前にもまして幅広い交流事業が行われたことを特記したいと思います。これらの交流プログラムは短期が中心ですが、学校訪問、ホームステイなどを含むもので、参加者から高い評価を受けています。私も韓国からみえる大学生、高校生、中学生の諸君に必ずお会いするよう努めて参りました。若い人たちの笑顔を見ることは本当に励みになりました。この事業を行うにあたって各地方自治体の国際交流担当部局や教育委員会に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

2) 基金はこの数年間、「日韓歴史共同研究委員会」、「日韓文化交流会議」、「日韓新時代共同研究プロジェクト」、「日韓歴史家会議」など、日韓両国の有力な学者、研究者、文化人が構成する会議体の運営を担ってきました。「日韓歴史共同研究委員会」においては、日・韓参加者の見解の相違を乗り越えて、第1期が2005年に、第2期が2010年にいずれも大部の報告書を提出しました。この研究会がいわゆる歴史認識の問題について正面から取り組み大きな足跡を残したことは高く評価されて良いと思います。「日韓文化交流会議」は、第1期が1999年から2002年まで、第2期が2004年から

2007年まで、そして第3期が2010年から2012年まで開かれ、両国の文化人が韓国における日本文化の開放や日本における韓流ブームを背景として日韓文化交流の将来について意見交換しました。第3

期日韓文化交流会議は「創造的日韓・韓日関係を目指して」と題する提言を2012年の5月に発表しました。「日韓新時代共同研究プロジェクト」は政治、経済、社会、文化を包摂する幅広い分野での協力増進を目指して第1期は2009年にたち上げられた知識人の会議ですが、2010年には第1期報告書「『日韓新時代』のための提言—共生のための複合ネットワーク構築」をまとめ、2011年に始まった第2期でも近く



第13回(2012年度)日韓文化交流基金授賞式(於韓国ソウル)にて

報告書がまとめられると聞いています。以上見たように当基金が高いレベルの意見交換の場に参加できたことは大変幸せなことでありました。

3) 「フェローシップ」は主に人文・社会科学の分野で研究を続けたいとする韓国および日本の研究者(博士課程修了以上)に差し上げているもので、毎年20人前後の韓国人フェローを日本に招き、同様数名の日本人フェローを韓国に送っております。滞在期間は原則11か月です。私は8年余りの勤務期間中、200人前後の若い研究者にお目にかかって議論させてもらいました。本当に貴重な体験でした。

4) 基金ニュースレターの読者の中には、基金の「助成」を受けられた方もあるでしょう。私どもは毎年40件から50件の交流事業に対し助成を行っております。日韓交流おまつり関係の行事や文化交流事業など有益なプログラムに助成をしてまいりました。

5) 以上の他、日韓文化交流基金は毎年9月に役員を中心とするミッションを組み韓国を訪問しています。これは1984年から行われている年次訪問で、今年は28回目としてソウル、水原を訪問、関係者との懇談・意見交換を行って来ました。また私どもはこの機会に日韓間の交流促進に貢献された韓国の方々には毎年「日韓文化交流基金賞」を差し上げております。今年はその13回目で、3人の韓国の方々を顕彰しました。

退任に当たり、これまで基金の活動を支えてくださった皆様にニュースレターの紙面をお借りして感謝申し上げます。テダニ・カムサ・ハムニダ。アンニョンヒ・ケセヨ。